

巻頭言

国際教育センター長 五味政信

本年 2013 年 5 月 1 日現在で本学に在籍する留学生数は 689 名となったが、この 689 名という数字は一橋大学の歴史上 (1875 年創立)、最大の数字であることは間違いないであろう。この 10 月に入学してくる留学生を考えると、本年度中に留学生数は 700 名に達するのではと予想される。5 年前 2008 年度版の大学案内を開いてみると、その留学生数は 585 名となっているので、大震災を跨いでこの 5 年間でほぼ 100 名増加したことになる。2008 年と 2013 年を留学生の身分で比較してみると、学部生は 140 名→195 名、大学院レベルの留学生は 404 名→443 名、交換留学生は 35 名→65 名であり、交換留学生の伸び率が最も大きい。海外の学生交流協定校の数は 27 校から 47 校に増加しており、近年は年間 100 名近い交換留学生が来学し、同時に本学学生が交換留学生として協定校に派遣されている。

この交換留学生の増加と本学学生の協定校への派遣を現場で支えている中核的組織は、言うまでもなく国際教育センターと国際課である。国際教育センターは 2010 年 2 月に改組され、新たな業務として、在学生 (主に日本人学生) の海外留学相談業務と、英語を教授言語とする社会科学関連分野の科目を中心に構成されている Hitotsubashi University Global Education Program (HGP) の企画運営の業務が加わったが、3 年を経て、その成果が目に見える形となりつつある。HGP は本学の全ての学生に開かれた教育プログラムであり、英語を学びの共通言語とすることにより、そこに集う学生と教員の多様性を高め、学生たちの異文化に対する理解と世界の人々と協働する際に求められる異文化間コミュニケーション力の養成を企図している。本学は「中期目標」の中で「世界で通用する多様な人材を育成するため、学部・大学院を通じて学生の国際交流を推進するなど、教育の国際化を推進する」との一項目を掲げ、また、「中期計画」では「英語による授業科目を増加させ、留学生・日本人学生の国際性を涵養する」と記しているが、これらの目標と計画を実現するための一つの方途が HGP であり、その中心的な実施機関がセンターと国際課であり、そして、その一つの成果が学生交流の上記の数字となって顕在化していると言って良いだろう。

さて、国際教育センターは「日本語教育部門」「留学生・海外留学相談部門」「国際交流部門」の 3 部門からなっているが、以下、昨年度の主な活動を振り返りつつ、今年度の活動についても展望してみたい。

日本語教育部門では、昨年度、週当たり 47 コマの留学生向け日本語科目を提供したが、それら多岐にわたる日本語科目の全体像を本学に学ぶ留学生と本学での勉学研究を希望する海外の学生が容易に把握できるよう、日本語科目群を技能別、レベル別に番号を付すなどの工夫を加えて整理し、一橋大学の日本語教育の全体像を目に見える形として website 上に掲載することができた。また、2011 年度に引き続き、2012 年度も大学戦略推進経費によるプロジェクト「社会科学の専門語彙・表現教育のための教材開発」への取り組みも継続し、その成果は 4 種の「社会科学

の専門語彙・表現教育のための教材」の開発に結実し、今年度はそのうちの一つについて出版社からの刊行を計画している。

留学生・海外留学相談部門は、留学生からの修学、生活相談に応じて問題解決を図る「留学生生活相談」と、留学生の適応上の問題を未然に防止するための「オリエンテーション・留学生交流支援」、そして海外への短期・長期の留学を希望する学生からの相談に応じる「留学相談」の3つをその基幹業務としている。昨年度の相談件数は年間約1,300件。2011年度に引き続き、在学生からの「留学相談」が相談件数全体の約30%を占め、相談内容のトップであった。来年度2014年度の海外交流協定校への派遣留学第一次申請は今年6月末で締め切られたが、申請者数は約90名であり、近年では最多数であった。一橋生の海外留学志向は大いに健在であり、今後、学生の中にある留学希望の芽を育て、留学のイメージを具体的な姿に転化する「留学相談」の役割がますます重要になると予想され、相談体制の一層の充実が必要となろう。

国際交流部門は前述の通り、HGPの企画運営に関わっており、2012年度、計55科目の英語を教授言語とする専門分野の授業科目、英語の運用力向上を目的とした英語科目等を提供した。2012年度の最大の改善点は関係部署との種々の調整を経て、交換留学生在が、通年科目として開講されている学部開講の「演習」科目をセメスター単位で履修登録できるよう制度改正を実現したことである。今年度以降の課題として、学内のグローバル人材育成プログラムとの関連において、HGPをより効率的なプログラムとして機能させるための新たな構想について全学で検討してゆくことが挙げられている。

急速なグローバル化と日々混迷の度を増す世界にあつて、日本の大学は改革すべき多くの問題を抱えている。創造的教育のためのカリキュラム改善、研究成果の積極的な発信とその社会への還元、入試制度改革、海外の研究教育機関との連携、教育の国際化の課題等々。そのような中で本学の国際化推進の課題の最前線に立つセンターとしては、上に述べて来た種々の活動を通じてキャンパスの国際化推進、教育の国際化にいっそう貢献できればと願っている。

2013年3月末をもって兼務教員の秋庭裕子先生が退職され(4月以降、引き続き商学研究科特任准教授として勤務)、後任として渡部由紀先生が2013年4月に着任、センター兼務教員を務めてくださっています。秋庭先生は国際教育関連の授業や国境・文化を超える能力育成プログラム(豪州、中国研修)など、センターの多くの教育活動・業務面でその質を大きく高めてくださいました。また、本センター教授鶴田庸子先生は2013年6月をもって退職されました。後任として、柳田直美先生が2013年4月より専任講師として着任しています。鶴田先生は1996年10月に当時の留学生センターに奉職され、約17年間、本学における日本語教育、留学生教育に携わってこられました。2008年度からは留学生センター長を務めるなど、センターの教育研究の発展と大学の国際化推進に多大なる貢献をされました。先生の深い学識とその魅力的なお人柄に学生たちも私たち同僚も魅せられ、そして絶大なる信頼を寄せ、敬愛の念を抱いてきました。ここ数年は体調を崩されましたが、十分に療養され早期に快復されますようセンターの教職員一同、心よりお祈り致します。

2013年7月